

写真で見る世界の子どもたちのようす

アフリカの子どもたち ユニセフ紙上写真展

今年9月末に、東京でひらかれた「第3回アフリカ開発会議」という大きな国際会議をきっかけに、ユニセフハウスでは、「今、アフリカで起きていること」という展示がおこなわれています。今回は、そこで展示されている写真を中心に、今のアフリカの子どもたちのようすを伝える、いろいろな写真をご紹介します。この号でもアフリカの話題を取り上げていますが、写真ではどんなことが見えてくるでしょう？

※ユニセフハウスでのユニセフ展「今、アフリカで起きていること」は2004年1月末までひらかれています。その後、全国各地でひらかれる予定です。

ザンビア

マラリアを防ぐ蚊帳を広げる家族。全世界でマラリアで亡くなる人は年間100～300万人。その90％はサハラ砂漠より南のアフリカの人びとで、アフリカ全体では、マラリアで30秒にひとりの子どもが亡くなっています。マラリアのワクチンはまだ開発されていません。病気のもとを運ぶ蚊に刺されないように、蚊帳を使うことがもっともよい予防法です。ユニセフは、安く手に入り、手入れがかんたんな蚊帳を広めています。

©UNICEF Zambia



ブルキナファソ

子ども国会で発言する子ども議員。ブルキナファソの子ども国会には、各地の地方子ども議会の議員代表100人（男女50ずつ）が集まります。ここで話し合われたことは、国の政策を決めるおとなたちに直接伝えられています。

©UNICEF WCAR/Kent Page



シエラレオネ
ブルキナファソ
コートジボワール

ケニア

はしかの予防接種を受ける子ども。2002年6月にケニアで行われたはしかの全国予防接種デーでは、生後9か月から14歳までの子ども、およそ1,400万人が予防接種を受けました。はしかが流行しないようにするには、予防接種の割合を95％以上にまで高めなければなりません。

©UNICEF/HQ02-0245/Thierry Geenan



ポリオのワクチン2滴が子どもの口に落とされます。ポリオの予防接種は注射ではなく、口からワクチンを入れてもらいます。戦争が長くつづくコンゴ民主共和国でも、2000年に、1,100万人の子どもを対象に大きなポリオ予防接種キャンペーンがおこなわれました。予防接種員は、一軒一軒をまわって、予防接種を受けていない子どもがいなくどうかを確認しました。

©UNICEF/HQ00-0675/Radhika Chalasani

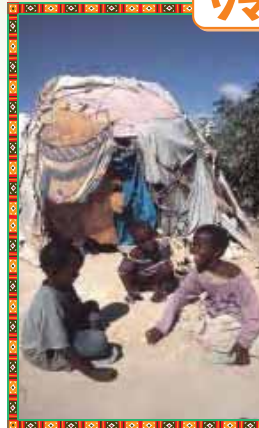
コンゴ民主共和国



戦争からにげてきた避難民が集まるキャンプで暮らす子どもたち。12年も政府がないままのソマリアでは、各地で氏族と呼ばれる勢力どうしの争いがつづいて、国全体が避難民キャンプのようになっています。

©UNICEF/Somalia-8/Pirozzi

ソマリア



アンゴラ

予防接種用のポリオのワクチンを運ぶ予防接種員。遠い村の子どもたちにもワクチンを届けるため、アフリカ各国で、山や川を越え、多くの人びとが協力しています。

©UNICEF Angola



スーダン



元子ども兵士だった子どもたち。解放され、保護キャンプに向かいます。スーダンでは、北部の政府と南部の政府に反対する勢力が戦争をつづけ、多くの子どもたちが兵士として使われています。解放されても、親のもとや住んでいた村に帰るのがむずかしい子どもも多いのです。保護キャンプでは、平和な生活にもどるためのさまざまなプログラムをおこない、帰るところのない子どもたちも教育を受けたり、社会で暮らしたりできるように手助けしています。

©UNICEF/Sudan





エラレオネ

キャンプにある学校で、戦争のときの話し合う子どもたち。棒を鏡に見たてて、少年が撃ち合いをしていたようすをみんな見えています。つらい思い出を心の外に出すのが、心の傷をなおすことにつながります。

FHQ01-0140/Roger Lemoine

再開された小学校で学ぶ子どもたち。内戦によって多くの学校がこわされてしまいましたが、親やコミュニティがお金を出し合い、小学校をつくって、学校をもう一度はじめるという努力をつけています。

©UNICEF/HQ00-0478/Radhica Chalasani



男の子と女の子の間の不平等が大きいところでは、女の子を学校に通わせるための苦労も大きいものです。しかし、いったん女の子が学校に行けるようになると、そのことが地域や社会に大きな変化をもたらします。

©日本ユニセフ協会/Mizuguchi



ソマリア

モスマ地域のユースセンターの開所式で、おしほいをしてHIV/エイズの知識を広める若者たち。娘をエイズで亡くして泣きさけぶ母親を演じるのは17歳の少女。ユニセフは、若者自身がHIV/エイズを防ぐ知識を学んだり、伝え合ったりする活動を応援しています。

©UNICEF/HQ00-0316/Roger Lemoine



タンザニア



ジンバブエ

女性ボランティアのカウンセリングを受けるお母さんと娘。41歳のお母さんはすでにエイズを発病して、はたらくことができず。かたわらで13歳の娘がメモを取りながら話を聞いています。この女の子は、学校の費用が払えないために、学校には通っていません。

©UNICEF/HQ02-0315/Giacomo Pirozzi



スーダン

戦争がつづかなか、地雷で足を失った子どもたち。

©日本ユニセフ協会/Shindo

アンゴラ

戦争や地雷について教えてもらう子どもたち。アンゴラには、戦争のために地雷や不発弾がたくさん残っていて、多くの子どもたちが犠牲にあっています。地雷を見たときにどうしたらいいかを小さいときからしっかり知っておくことが大切です。

ICEF Angola



ボツワナ

ラジオ番組を通じて、HIV/エイズの予防についての話を中学生。たくさんのお母さんがかえるアフリカ各国では、問題の解決や知識を広める活動に子どもや若者自身が積極的に参加している例がどんどん増えています。

©UNICEF/HQ01-0198/Giacomo Pirozzi

モザンビーク

洪水のために避難してきた4万人が暮らすキャンプの中の水場に集まる女性や子どもたち。こうしたキャンプでは、子どもを病気や死から守るために、安全な水がもっとも大切です。

©UNICEF/HQ0-0157/Giacomo Pirozzi



2002年に起こったクーデターから、まだ政治や社会が安定していないコートジボワールでは、100万人の子どもたちが学校に行けなくなってしまいました。今、その子どもたちを危険から守り、学校にもどるようになるための活動がつけられています。

©UNICEF WCAR/Kent Page

コートジボワール



ジンバブエ

干ばつ（雨がふらず大地がかわきまわってしまい、作物もつれなくなってしまうこと）のためにはたてたもうろこし畑にたたく男の子。アフリカ南部の国々には、干ばつが広がって食糧が不足しています。また、HIV/エイズが広がって、はたらきかたの人がたくさん亡くなっているために、働きから立ち直ることがむずかしくなっています。

©UNICEF/HQ02-0297/Giacomo Pirozzi